

英語の語頭有声歯摩擦音 /ð/ が消えるとき

松 瀬 憲 司

When the word-initial voiced dental fricative /ð/ in English disappears

Kenji Matsuse

(Received September 29, 2023)

The objective case of the third person plural pronoun, i.e., *them* often takes the form of *'em* when it is pronounced as its weak/unstressed form in informal speech of Present-day Standard English (PSE). Here, however, what the apostrophe abbreviates is not the voiced dental fricative /ð/ sound which is spelled <th>, because this kind of sound-dropping does not seem phonetically relevant. As a matter of fact, this abbreviation is thought to be /h/-dropping of *hem*, which was the forerunner of *them* in PSE and used in Middle English; *them* was a loanword from Old Norse and not derived from the original native pronoun in Old English. Therefore we find that even now we are still using in our spoken language a revised version of the ancient third person plural pronoun. Then, does the word-initial /ð/ sound in English never drop in any environment? In reality, we can say that we do have some examples of that kind. One of such cases is assimilation of the /ð/ sound by the immediately preceding /n/ sound in the strings like *in the* or *on the* in informal speech; they sound like /innə/ or /ɔnnə/. Also we have some idioms like *at last*, etc. or interjections like *attaboy*, etc., and especially in the latter we are sure to find the phenomenon to be regarded as a pure kind of word-initial /ð/-dropping, because there is no sound at all before the dropped /ð/ sound of the expression.

Key words : weak/unstressed form, *'em*, voiced dental fricative, dropping, spoken language, assimilation

1 はじめに

現代標準英語 (Present-day Standard English: PSE) の口語において, 三人称複数代名詞の目的格 *them* がその弱形として, /ðəm/ ではなく, 語頭の「有声歯 [間] 摩擦音 (voiced [inter]dental fricative)」/ð/ を脱落させ,¹⁾ 屢々 /əm/ という発音になる現象を「*'em*」と表記して示すことがある。例えば, 映画『ローマの休日』(1953年公開) のスクリプトには以下の遣り取りが見られる。

(1) IRVING: Joe, look at my pants. What...

JOE: Yeah. You better come in here and dry *'em* off, Irving.

—曾根田他 (2009: 91)

JOE は (自分でわざと IRVING にワインをひっかけておいて) ワイン塗れになったズボンを早く風呂場で乾かせと IRVING を急かしている。そしてここでの *'em* はもちろん IRVING の pants を指しており, /draiəmə:f/ と発音されている。また, 次の『バック・トゥ・ザ・フューチャー』(1985年) では,

(2) LORRAINE: Do you have a television?

MARTY: Well, yeah, you know we have... two of *'em*.

MILTON: Wow, you must be rich.

STELLA: Oh, honey, he's teasing you. Nobody has two television sets.

—菅 (1998: 74)

まだテレビが珍しかった1955年に生きる女子高生 LORRAINE (MARTY の未来の母), 弟の MILTON, 母親の STELLA にとって, 1985年の未来からタイムスリップして来た MARTY の台詞は奇妙に聞こえたらうが, 実際 MARTY の家にはテレビが二台あったので, 彼は正直に /tu:əvəm/ と言っただけだった。

この現象について児馬 (2018²: 58) は, *'em* という表記法から示唆されるような, *them* の語頭音 /ð/ の脱落は, PSE では「一般的な音声学的現象としても知られていない」ので, これを説明するには「英語史的」視点が必要であるとする。つまり, 実は *'em* は *them* の語頭部分 <th> [/ð/] (<> は書記素 [grapheme], 即ち「綴り

字」を表す)が脱落したのではなく、中英語(Middle English: ME)期に使用された三人称複数代名詞の目的格 *hem* の語頭 <h> [h] が脱落したのだと。²⁾なるほど大本の形が *them* ではなく *hem* であれば、この現象は PSE の三人称単数代名詞の目的格 *him* や *her* が屢々 /əm/ (表記すれば 'im になる) や /ər/ ('er) という弱形でそれぞれ発音されることと平行であることがよく分かるし、*OED*² (s.v. 'em) にも確かに以下の (3a) の記述がある。

(3) a. Originally the unstressed form of HEM, dat[ive] and accus[ative] 3rd pers[on] pl[ural]. The emphatic form of the pronoun was early superseded by THEM, but the unstressed form continued to be used, being regarded as an abbreviation of *them*. In literature it is now obs[olete] or arch[aic], but is still common in familiar speech.

b. þer na ascapedem non. (= there no one escaped *them* at all) —*Sir Ferumbras*, 3098 [1380]

c. But soore wepte she if oon of *hem* were deed. (= But bitterly wept she if one of *them* were dead)

—*The Canterbury Tales*, I (A), 148 [c1375-a1400]

ここで下線で示した「('em が) *them* の短縮形と見做されていた」という記述は後の議論でもう一度取り上げる。また、この 'em の初出例 (3b) は ME 後期に当たる 14 世紀の例だが (例文の [] 内に作品の成立年を示している)、省略符 (apostrophe) 「'」は使用されておらず、しかも動詞と一体化していて非常に興味深い。しかし通常は、Beidler (2011: 15) も指摘しているが、(3c) でチョーサー (Geoffrey Chaucer, c1343-1400) が用いたように、この当時イングランド北部地域を除いて、*them* はまだ全域には浸透していないので、強形も弱形も *hem* で表されていた (ただし、主格の *they* はロンドンの英語にも既に広まっており、事実チョーサーは常に *they* を使用している)。

であるならば、語頭音 /ð/ の脱落はやはり (英語史を通じて) 普通あり得ないことになるが、果たして本当にそうであろうか。本稿では、以下に示す二つの表現を通してこの点をもう少し掘り下げてみたいと思う。本稿の構成は次の通りである。次節ではまず、語頭音 /ð/ の出現は、英語では三人称複数の人称代名詞、定冠詞 (*the*)、そして指示詞 [指示代名詞と指示形容詞] (*that/this*, etc.) といった機能語 (function words) に特化している実態を確認する。その流れを受けて続く 3 節では、*at last* とそれに類する「前置詞+最上級形」の慣用句等を、4 節では、*Attaboy!* (= *Great job!/Way to go!*) という表現等をそれぞれ議論する。そして 5 節で全体の議論をまとめる。

2 三人称複数代名詞・定冠詞・指示詞の語頭音有声化

まず歴史的経緯を押さえるために、古英語 (Old English: OE) における三人称複数代名詞と定冠詞/指示詞の形態を以下の (4a) と (4b) にそれぞれ示す。なお、OE では、定冠詞と指示詞は確立した品詞範疇としては未分化であり、しかも、英語と同じ西ゲルマン語に属する現代ドイツ語のように、性 (gender)・数 (number)・格 (case) による形態的区別も厳然となされていた。(4b) には、煩雑になるので、(4a) のような提示法は避けて、その性・数・格による変化形態を全種類示すだけに留めている (つまり、形態上の重複がかなりあったのである)。

(4) a. 主格: *hi(e)*, 属格: *hiera/hiora*, 与格: *him*, 対格: *hi(e)*

b. *se, þæs, þæm, þone, þy, seo, þære, þa, þæt, þara*

(4a) から即座に分かることは、OE の三人称複数代名詞に語頭音 /ð/ は影も形もなかったということだ。では、PSE の *they/their/them* は一体どこから湧いて出たのか。それは、9 世紀からイングランドに定住し始めた、あの北欧のヴァイキングたち (Vikings/Scandinavians) がもたらしたと言われている (横田 (2012a, b) 参照)。彼らの言語である古ノルド語 (Old Norse: ON) の三人称複数代名詞のうち、男性主・属・与格形の *þeir/þeir(r)a/þeim* が、彼らと OE 話者であるアングロサクソン (Anglo-Saxons) が共生することになった地域 (イングランド東部のデーネロー [Danelaw]) において、ON から OE に取り入れられたとされている。³⁾ なお、当該の ON 三人称複数代名詞が実際にはどのような形態で OE で使用されていたのかを、現存する OE の文献から窺い知ることはできない。当初文語ではなく、口語として導入されたからだ。それらを文献で確認するためには、ME 期の到来を待つ必要がある。それよりもむしろこの OE の状況で我々が注目すべき点は、与格形 *him* (これは、男性単数・中性単数与格形と同じ形だった) から上記で議論した *hem* が派生していることである (註 2) 参照)。そしてそれが PSE の口語 'em に繋がっていることを考えると、OE での形態が現

代にまで脈々と受け継がれている実態が判明する。⁴⁾ 英語の歴史を体感する一瞬である ((3a) の OED² の記述も参照)。

次に、定冠詞／指示詞を確認する。(4b)のうち、男性単数主格形の *se* から (*þe* への変化を經由して) PSE 定冠詞の *the* が、中性単数主・対格形の *þæt* から指示詞の *that* が、そして複数主・対格形の *þa* から指示詞の *those* がそれぞれ派生している。⁵⁾ しかも、ここでルーン文字 <þ> (後に二重字 <th> に置き換わる) が OE 期に表していた音価は実は有声音ではなく、「無声 (voiceless)」音であった。即ち、*þe* や *þæt* は、/ðə/ や /ðæt/ ではなく、/θə/ や /θæt/ と無声歯摩擦音を伴って発音されていたことが分かっている。OE では、語頭や語尾に生じる <þ> は常に無声音で発音され、有声音になる <þ> は、例えば、*baþian* /bɑðian/ 'to bathe' のように、その前後に母音等の有声音が生じた場合にのみ実現されたのである (このことは、<f> や <s> で表記される他の摩擦音にも同様に当てはまる)。ということは、歴史的には定冠詞／指示詞の語頭 <th> [/θ/] に「有声化 (voicing)」が起こったと言える。

摩擦音 /θ/・/ð/ に関する、このような OE の位置による発音の弁別システムはおそらく、OE 口語に新たに導入された一連の ON 三人称複数代名詞が持つ語頭の <þ> にも適用されたであろうことは想像に難くない。つまり、*they/their/them* に相当する当時の借入形の発音も当初は無声音 /θ/ の音価を持っていたと考えられ、後に有声化したということになる。

しかし、他方、英語が所蔵する単語の語頭無声音 /θ/ [<th>] が全て有声化した訳ではないという事実もある。だから、Ogden (2017²: 27) は PSE における摩擦音 /θ/ と /ð/ の分布を次のようにまとめている。

(5) a. /θ/: content words (noun, verb, adjective): *think, ether, truth, tenth*

b. /ð/: between vowels or initial in function words: *rather, breathe, though, they, this*

ただし、(5b) で指摘されている「機能語」もこれまた全てではなく、語頭有声化が起こったのは、三人称複数代名詞、定冠詞、指示詞が代表的で、⁶⁾ 他には、(5b) で例示されている接続詞 *though* [OE *þeah*] や *then/than* [OE *þonne*] が挙げられるくらいだ (これに対して、前置詞 *through* [OE *þurh*] は依然 /θ/ のままである)。⁷⁾ 同様に、(5a) にあるように、名詞 *ether* /i:θər/ 「エーテル」は、(5b) の母音に囲まれた環境にあるにも拘わらず、有声化していない。⁸⁾ このように確かに一部例外はあるが、傾向として英語では機能語の語頭は有声化したと言っていい。では、それはなぜか。これには、1066 年に起こった「ノルマン人の征服 (Norman Conquest)」以降の、借入による英語へのフランス語 (究極的にはラテン語) 大量流入が大きく関係していると思われる。

当時の古フランス語の語彙には、OE と異なり摩擦音のグループで語頭に有声音が生じるものがあつた。それは、例えば、*very* の /v/ (歯唇音) と *zeal* の /z/ (歯茎音) であり、それに対応する書記素 <v> と <z> があるため、OE のように位置による制約は受けない。逆に言えば、OE において有声無声の区別は、同じ書記素 <f> や <s> の「異音 (allophone)」として処理することができていたため、わざわざ有声音専用の書記素 <v> や <z> を別途用意する必要はなかった (Mitchell and Robinson (2012⁸: 15))。しかしフランス語借入によって語頭有声音 /v/・/z/ が OE の音韻体系へ導入されたので、これまでの OE システムが崩壊し、全体として有声摩擦音が語頭に生じることができるようになったのが新に獲得されたのだ。ただフランス語 (そのルーツのラテン語) には、摩擦音 /θ/・/ð/ は存在しなかった。⁹⁾ だから、英語の <th> に関しては、語頭有声化の可能性だけが取り入れられ、当然のことながら (そもそもそのようなものはなかった) 有声音 /ð/ 専用の書記素が新たに外部から取り入れられることはなかったのである。¹⁰⁾

次に、では、なぜ <th> で始まる機能語のみが語頭有声化を引き起こしたのかを考えてみる。本来ならば、OE 以来の伝統的な、位置による摩擦音の有声無声弁別システムが崩壊した時点で、ME 期当時の英語使用者がそれを区別する専用の書記素をそれぞれ決定するチャンスは十分にあつた。それは、OE で *eth* と呼ばれる書記素 <ð> の存在である。アングロサクソンたちは、イングランド入植後キリスト教に改宗すると共にラテン文字 (Roman Alphabet) を導入することにしたが、ラテン語には存在せず、しかし英語には存在した摩擦音 /θ/・/ð/ を表すために、大陸在住の頃に使用していたルーン文字 <þ> を残留させ (他のルーン文字はあっさり捨てた)、同時になぜかラテン文字 <d> を改造した <ð> も創作した。¹¹⁾ そしてこれら二種類の書記素は、摩擦音 /θ/・/ð/ を表すのに無差別に使用されていた (Jespersen (1949: I, 2.613))。つまり、既に OE の段階で歯摩擦音に関しては、位置による弁別システムは不要で、例えば、<þ> を /θ/ に、<ð> を /ð/ に割り振ることも可能だったのだ。にも拘わらず、当時一握りしかいなかった、OE を書き残した者たちは敢えてそうしなかったという事実がある。おそらく、他の摩擦音との関係もあり、弁別システムそのものが十分に機能していた

ので、そちらの方が重視され、敢えて二種類の書記素によって有声無声を区別する必要性が感じられなかったのかもしれない。

その後、ME期に入り、歯摩擦音を表す当該のルーン文字や特殊文字は廃絶され、それらをフランス人写字生が持ち込んだ二重字 <th> に置き換えるという流れになってきていたこと (Jespersen (1949: I, 2.614), Freeborn (1998²: 82)) と語頭有声化が可能になる状況が緋い交ぜになり、/v/ や /z/ と違って、特に /ð/ 専用の書記素が示されなかったため、語頭音 /ð/ のための書記素新規導入は見送られたのではないかと考えられる。最終的に、この語頭歯摩擦音有声化の有効活用は「品詞による差別化」によって実現されることになる。そもそも語頭 <th> のデフォルト音は /θ/ なのだから、内容語がまずこれを保持した。そして機能語の語頭 <th> の場合、to thee 等に見られるような、母音に挟まれる環境が多かったために実際に有声化し易かったこともあり (Jespersen (1949: I, 6.53)), 新たに獲得した語頭有声音 /ð/ は自然と機能語の方に割り振られることで、両範疇の差異が際立つようになったのだろう。このようにして、両歯摩擦音に単一の書記素 <th> を使う際に生じる弊害がある程度解消されたと言える。¹²⁾

上記の歴史を辿ってきた語頭有声歯摩擦音 /ð/ を持つ機能語のうち、三人称複数代名詞 *them* のそれは脱落することがあるのかということについて、前節と本節で口語表現 'em を通して議論してきた。結論は、実は省略されているのは ON 借入語 *them* の /ð/ ではなく、英語本来語 *hem* の /h/ であり、結局語頭音 /ð/ は脱落していない、というものだった。残された語頭音 /ð/ を持つ機能語は、定冠詞と指示詞である。次に、それらを以下の3節と4節でそれぞれ取り上げることしたい。

3 「前置詞+最上級形」の慣用句

PSEの定冠詞 *the* には、上記(3a)の下線部で示したように、本来は違うのだが、「*them*の省略形と見做される」表示方法としての 'em に準じる「*e」などという表示形はもちろん存在しない。しかし、*the*の語頭音 /ð/ が実際に発音されない現象は確かに存在する。それはまず、以下の(6)のような、所謂「順行同化 (progressive assimilation)」が起きる環境においてである (川越 (2007: 129))。

(6) a. What's the time? /wɒts zə taim/

b. in the morning /ɪn nə mɔːnɪn/¹³⁾

—Cruttenden (2001⁶: 184)

(6a)は部分同化、そして(6b)は完全同化の例であり (川越 (2007: 130)), このように語頭の /ð/ が発音されないという事実からすれば、これをある意味 /ð/ の脱落と見ることも十分可能であろう。そしてそれは、三人称複数代名詞の目的格形についても言えることである。つまり、*them*の疑似省略形 'em ではなく、*them*そのものが生起する場合においてでさえ、(6b)と同じような環境、例えば、*in/on them* という連鎖では、'em と表記された場合とほとんど変わらない発音になる可能性があるからだ。¹⁴⁾ただ、それよりも(6b)のような同化現象が特に英語学習者にとって非常に厄介なのは、口語においても頻出する連鎖である *in/on the* と *in/on a* がほとんど区別できないという事実である。このように定冠詞 *the* の語頭音 /ð/ の脱落は、定冠詞と不定冠詞間の意味上の大きな落差を覆い隠してしまうことになる。

次に、視点を少し変えて、「最上級 (superlative)」形を含む慣用句を取り上げる。当然のことながら、(形容詞の)最上級は通常 *the* を伴う。しかし、例えば、*at last/first/best/most/least* 等の表現のどれにも *the* は見あたらない。ところが、時間を遡ると、やはり *the* は確実に存在していたのである。以下、*at last* の例で確認する。

(7) a. At þe laste hit most be kidde. (= *At last* it must be told)

—*Cursor Mundi*, 4274 (Trinity) [c1340]

b. Trewely to tellen atte laste (= *Truely* to tell *at last*)

—*The Canterbury Tales*, I (A), 707 [c1375-a1400]

c. at the > atte > at

実は、*OED*² (s.v. *last*, 10a) に示されている *at last* の初出例は、12世紀の *att tallre lattste* 'at the last of all' という形であり、¹⁵⁾ 所謂 *at the last* という形そのものの初出例は14世紀前半の上記(7a)である。さらにその *at the* が14世紀後半の(7b)のチャーターでは、*atte* になってしまっていることが分かる。つまり、(7c)で示したプロセスを経て、同化現象の最終形としてこの表現に前置詞 *at* だけが残留したように見えているにすぎない。この表現の成り立ちは、*atte* の第二音節の *schwa* /ə/ が消失したことによるが、*the* の語頭音 /ð/ が消えるだけでなく、究極的には *the* そのものが消滅する事態までも引き起こしたのである。なお、*OED*² (s.v. *last*, 10b) によれば、PSEで *at last* と同じ意味で使われる *at long last* も、16世紀に *at the long last* で出発したが、20世紀以降は、*the* は完全に消滅してしまっている。

他の at best/first/most/least 等の類似表現については、全て at last と同様の経路を辿っていると思われるかもしれない（以下の (8) に、各表現で *atte* が使用されている例を *OED*² より挙げる）。しかし *OED*² は、at the most と at the least には「廃用 (obsolete)」の印を付けておらず（従って現在も the はしっかり生き延びている）、at the first は「まれ (rare)」とし、at the best だけを「廃用」としている。ただ、たとえ the が生き残っていたとしても、実際にそれが発音される際には、おそらくほとんどの場合何らかの程度の同化を起こしているであろうと考えられるので、the の語頭音 /ð/ 自体は「実質的には」脱落していると捉えざるを得ない。

- (8) a. And wel we weren esed *atte beste* (= And well we were eased at best)
 —*The Canterbury Tales*, I (A), 26 [c1375-a1400]
 b. ... þat herde him *atte furste*. (=... that heard him at first) —*Piers Plowman*, A, VII, 159 [1362]
 c. Ther thu schalt fourti dayes bileve *atte meste*. (= There you shall forty days believe at most)
 —*St. Brandan*, 31 [c1300]
 d. Thanne haue ye do youre deuoir *atte leeste*. (= Then have you done your duty at least)
 —*The Canterbury Tales*, II (B¹), 38 [c1375-a1400]

4 間投詞 *Attaboy!*

最後に、指示詞 *that* を取り上げる。まず指摘すべきことは、定冠詞 *the* に順行同化が起きる環境と同じ状況、例えば *in/on that* のような連鎖は指示詞 *that* にも頻繁に起こり得るので、ここでも /innət/ や /ɔnnət/ という発音になり、実質的な語頭音 /ð/ の脱落が見られると言っている。それよりも指示詞 *that* で特筆すべき点は、定冠詞 *the* を含む表現には見られなかった現象として指摘できる、間投詞 *attaboy* における *that* の振る舞いである。¹⁶⁾ *OED*² (s.v. *attaboy*) には、以下の (9a) のように記載されている。

- (9) a. int[erjection], slang (chiefly U.S.) Also **at-a-boy**, **ata boy**. Said to represent careless pronunc[iation] of *that's the boy!*. An exclamation expressive of encouragement or admiration. Hence **attagirl**, etc., as non-words.

b. The marines rose from their chairs to encourage the new performer: '*Attaboy*, soldier! *Attaboy!* Shake 'em doggies!¹⁷⁾
 —Harry La Tourette Foster, *A Tropical Tramp with the Tourists*, 101 [1925]
 なお、初出の形としては *at-a-boy* が挙げられており、1909 年となっているが、所謂 *attaboy* という形での初出例は (9b) の 1925 年である。さらに、*OED*² (s.v. *thataboy*) の記述を見てみよう。

- (10) a. int[erjection], slang (chiefly U.S.) Also **that a boy**, **thatta boy**, etc. Corruption of *that's the boy*, or alteration of *ATTABOY* int[erjection]. An exclamation of encouragement or admiration.

- b. 'All right, let's go,' he said. '*Thataboy*,' roared Farrell.

—John Roderigo Dos Passos, *The Big Money*, 287 [1936]

上記 (9a) と (10a) より分かることが二つある。まず、*attaboy* も *thataboy* も *that's the boy* の「杜撰な発音」や「(発音の) 崩れ」の結果生成されたと考えられているということ。そして、*that's the boy* から *attaboy* が生じた後も、語中の *the* に関してはどちらも同化により語頭音 /ð/ が脱落しているが、*that* の語頭音 /ð/ が脱落していない形の *thataboy* (*attaboy* の「交替形」とある) も完全に消滅することなく使われ続けていることである。また、前節で議論した定冠詞 *the* の場合、語頭音 /ð/ の完全な消失形として *the* そのものが消滅してしまう *at last/best* という形態にまで進行することがあったが、この表現では、-(t)a- の部分は辛うじて音節として残っており、**atboy* のような形にはならないようだ。この *attaboy* は、表示形 'em と *them* が共存する点では、三人称複数代名詞の振る舞いとよく似ており、中間部 -(t)a- で弱音節を保持している点では、*at last/best* の中間形態 *atte laste/beste* の要素も持っていると言えるだろう。そして何より元々「文頭にあった」、つまり、直前に影響を与える可能性のある音が皆無の環境にある /ð/ 音が、表現全体の発音がぞんざいで崩れているにせよ、発音されないことがあるという事実をこの圧縮表現 *attaboy* はしっかり伝えてくれている。

5 まとめ

以上の議論をまとめると、(視覚的デバイスである) 所謂 *apostrophe* を使った「(疑似) 省略形」としての形によって、語頭音 /ð/ の脱落を表示することは普通ないが、自然な発音の流れの中でそれが他の音と同化

し、結果脱落することは大いにあり得ると言える。特に注目すべきは、間投詞 *attaboy* に含まれる *that* の場合、語中で先行する音によって同化される *the* とは異なり、この表現の原形は「文」なので、まさにその文頭に生じる *That* の語頭音 /ð/ がある意味「純粹に」脱落することがあることを示している。そういう意味では、このような現象は（稀だが）実際にあると捉えてもいいのではなかろうか。

なお、『ローマの休日』には、次の表現も見つかっている。

(11) JOE: Yeah, here's your drink right now, Irving. Take it easy. I'm sorry about that.
Sit down, that's a good fella. Have a... *That's a boy*.

IRVING: You're... You're twisting my arm, you know.

—曾根田他 (2009: 62-63)

実は、JOE のアパートでのシーンである上例 (1) の前にも一度、カフェで JOE は IRVING にわざとコーヒーをひっかけていたのだ。このスクリプトでは、*That's a boy* という風に「文」として書かれているが、これは明らかに間投詞 *thataboy* である。そして、ここで面白いのは、定冠詞 *the* ではなく、不定冠詞 *a* として書き起こされている点で、所謂「文」ならば、基になった表現である *That's the boy* となるはずだが、そうならないのは、間投詞としての「発音」を文であるかのように表現したからだろう。だが、これはまさに *the* の語頭有声歯摩擦音 /ð/ が消えてしまっていることになりはしないか。

註

- より正確に言えば、舌尖 (apex) を使うので、舌尖歯摩擦音 (apico-dental fricative) という呼称になる (竹林 (1996: 39))。また、この音の調音に当たっては、舌尖を上下の歯の間から少し出して発音する場合もあることから、歯間音 (interdental) と呼ばれることもあり、この歯間音は英国人よりも米国人によく見られる調音法だという (竹林 (1996: 200))。
- この *hem* は古英語後期に三人称複数代名詞の与格形 *him* と対格形 *hi(e)* が合体して出来た *heom* から派生したと考えられている。Clark Hall and Meritt (1960⁴, s.v. *heom*) では、*d[ative]p[lural] of he, heo, hit* と記載されている。
- OE と違って ON では、三人称複数代名詞も性による区別がなされていた (Barnes (2008³: 61))。また、横田 (2012a: 4) は、「デーノンロー地域はひとつの法律システムを基盤にした統一された地帯ではなく、個々の地域がそれぞれ組織的な特色を持った集合体であった」とし、「一般にデーノンロー地域の北へ行けば行くほど、北欧人の影響が強く浸透していた」と述べている。
- 横田 (2012b: 124) によれば、北部及び南部の方言には、所謂 *hem* の弱形 *em* が人称代名詞の *them* として使われ、*them* の方は遠位指示詞複数の *those* の意味を表すものがあるらしい。これらの地域でのこの現象から横田は、*them* は実は OE の指示詞複数与格の *þæm* にも起源があるのではないかと考えており、ON の *them* 導入とは違うルート、つまり、人称代名詞と類似の機能を持っていた英語本来語の「指示詞」から *them* が発達した可能性を示唆している。
- ちなみに、PSE の *this/these* に当たる OE 形態は、*se* や *þæt* とはまた別の一群の語形変化を持っていて、中性単数主・対格形の *þis* と複数主・対格形の *þas* からそれぞれ *this* と *these* が派生している。また、*those* へと変化する *þa* は複数主・対格形だけでなく、女性単数対格形も表していた。
- 三人称複数代名詞と同じ人称代名詞では、嘗て広く使われていたが、現在では地域方言にのみ残る二人称単数代名詞 *thou/thy/thee* の <th> も有声化している。
- 実は、この *though* は OE *þeah* の派生形ではなく、ON *þoh* を借入したものであるが、いずれにしてもこの <þ> は無声音 /θ/ であつたはずだ。また、*through* については、前置詞と副詞としてエントリーしている *OED*² (s.v. *through*) に、<u> と <r> の「音位転換 (metathesis)」は ME 期に起こり、主に北部方言の特徴であったが、初期近代英語期に William Caxton (1415/22?-1492) が登場した後標準形となったという記述があるので、内容語としても使われた経緯と他の機能語とは違う、音位転換によって /θr/ という子音結合が発生した環境が、機能語にも拘わらず無声音 /θ/ を保持させた原因ではなかろうか。
- この *ether* は、1350-1400 年にラテン語から借入されていることを考えると、ラテン語やギリシア語 (例えば、*enthusiastic* [1595-1605 年] 等) からの借入語だからという理由が挙げられるだろう。当該の <th> は元々無声摩擦音 /θ/ で発音されていたわけではなく、「帯気音の (aspirated) 無声破裂音 /t/ だったことを表すために無声音 /θ/ が採用されたと思われる。
- 島岡 (1982: 4-5) によれば、古フランス語では、11 世紀までは語末の <θ> は /θ/、母音間の <d> は /ð/ と発音されていたが、12 世紀以後当該の音の存在自体が消失したという。しかも後者は『聖アレクシ伝 (*Vie de saint Alexis* [c1040])』では、<th> で表記されていたらしい。当該の音自体が消えたので、同時にその書記素も消滅したのだ。
- Horobin (2010: 61) は、無声音 /θ/ の有声化は /f/ や /s/ よりも遅かったが、14 世紀後半までには有声化していたと述べている。<th> の場合、フランス語から語頭の /v/ や /z/ を携えた単語がそのまま流入してきた <v> や <z> の状況とは違うので、このタイムラグは当然であろうし、ある意味、語頭の有声可能性のみが取り入れられたことの証左でもある。
- ドイツ語でも、*für* 'for' と *Vater* 'father' のように、無声歯唇摩擦音 /f/ には、<f> と <v> の二つの書記素が与えられているし、フランス語でも、*gentil* 'gentle' と *jeune* 'young' のように、有声硬口蓋歯茎摩擦音 /ʒ/ には、<g> と <j> の二つの書記素が与えられているので、この行為自体はそこまで特殊なものではないようだ (日本語の「は」と「わ」も同様である)。
- とは言え、その後も二つの歯摩擦音に書記素 <th> 一つしか用意されていないことに対する不満はあったようで、Horobin

(2010: 66) によれば, 16世紀の綴り字改革者 Sir Thomas Smith (1513-1577) は, OEの書記素 <þ> と <ð> を復活させ, それぞれを無声音 /θ/ と有声音 /ð/ に割り振ることを提案しただけでなく, それらに加えて全くの外国語文字であるギリシア文字の <θ> (テータ) と <Δ> (デルタ) までも提案したという。

- 13) ここで, /mɔːnɪŋ/ではなく, /mɔːnɪn/となっているのは, インフォーマルな口語での発音を示しているからである。
- 14) さらには, *send/find them* のような場合, 先行する /n/ だけでなく, それに続く, /ð/ と類似した調音を持つ /d/ の橋渡しもあり, より /ð/ の同化が進行すると考えられる。なお, 今井 (2007: 122) では, *than* も弱形 /ən/ になると指摘されているが, それ以外の弱形機能語には全て語頭音 /ð/ が存在しており, その脱落は特に示されていない。
- 15) この表現は *Ormulum* の 13319 行に見られ, ここでの *tallre* を分析すると, *allre* は *all* の属格だから, *t'* (= *te 'the'*) + *allre* (= *of-all*), 即ち, *the + of-all* となる。
- 16) *LDCE*⁵ (s.v. *attaboy*) では, 以下のように説明されている。
(i) *used to tell a male person or dog that he has done something well, or to encourage him*
どうやらこれは主に男性と「雄犬」に対して使われる表現のようだ。
- 17) 下線で示したように, 奇しくも 'em が現れているところからも, *attaboy* が典型的な口語表現 (slang) であることが分かる。

参考文献

- Barnes, M. 2008. *A New Introduction to Old Norse. Part I. Grammar.* 3rd edition. London: Viking Society for Northern Research.
- Beidler, P. G. 2011. *A Student's Guide to Chaucer's Middle English.* Seattle, WA: Coffeetown Press.
- Benson, L. D. 1987. *The Riverside Chaucer.* 3rd edition. New York: Houghton Mifflin.
- Clark Hall, J. R. With a supplement by H. D. Meritt. 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary.* 4th edition. Toronto: Toronto Univ. Press.
- Cruttenden, A. 2001. *Gimson's Pronunciation of English.* 6th edition. London: Arnold.
- Freeborn, D. 1998. *From Old English to Standard English.* 2nd edition. London: Macmillan.
- Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English.* Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- 今井邦彦. 2007. 『ファンダメンタル音声学』 東京: ひつじ書房.
- Jespersen, O. 1949 [1909-1949]. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part I. Sounds and Spellings.* Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- 川越いつえ. 2007. 『英語の音声を科学する』 東京: 大修館.
- 児馬修. 2018. 『ファンダメンタル英語史』 改訂版. 東京: ひつじ書房.
- Mayor, M. (dir.) 2009. *Longman Dictionary of Contemporary English.* 5th edition. Harlow: Pearson. [= *LDCE*⁵]
- Mitchell, B. and Robinson, F. C. 2012. *A Guide to Old English.* 8th edition. Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary.* 2nd edition. Oxford: Clarendon Press. [= *OED*²]
- Ogden, R. 2017. *An Introduction to English Phonetics.* 2nd edition. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- 島岡茂. 1982. 『古フランス語文法』 東京: 大学書林.
- 曾根田健三他編. 2009. 『ローマの休日 (*Roman Holiday*)』 東京: 開文社.
- 管孝子監修. 1998. 『バック・トゥ・ザ・フューチャー (*Back to the Future*)』 名古屋: スクリーンプレイ.
- 竹林滋. 1996. 『英語音声学』 東京: 研究社.
- 横田由美. 2012a. デーンロー地域内の社会的不均質性について—言語史的立場からの考察—. 『島根県立大学 総合政策論集』, 22, 1-15.
- 横田由美. 2012b. 『ヴァイキングのイングランド定住—その歴史と英語への影響—』 相模原: 現代図書.